

Title	Already, Nowと「局面の変化」
Author(s)	家木, 康宏
Citation	Osaka Literary Review. 22 P.1-P.12
Issue Date	1983-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25636
DOI	10.18910/25636
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Already, Now と「局面の変化」

家 木 康 宏

1. はじめに

従来 *already*, *still*, *yet* などいわゆる時の副詞については種々の立場から研究がなされてきた。例えば Traugott & Waterhouse (1969) においては、*already* と *yet* は PERFECT という素性を持つ相補的な aspect-marker であると主張されている。また *still* については同様に PROGRESSIVE という素性と関連づけられている。

一方、Morrissey (1973) では *still* と *anymore* が対極をなすと考えられており、これらの副詞は発話時及び動作時における事象の真理条件により分類されている。

さらに Horn (1970) や Ladusaw (1980) では前提・予想・断定などという面から *already*, *still*, *yet* などの機能が分析されている。

小論ではこれらの研究を概観した上で、従来の研究ではあまり扱われることのなかった副詞 *now* がこれらの枠組の中でどのように位置づけられるかを検討し、*already* と *now* の関係を明らかにしたい。

2. 従来の研究の概観と検討

ここでは「状況の変化」ということに関連して副詞を分析している二つの研究をとりあげ、その分析が *now* にも適用できるかどうかを考察したい。

2.1 Traugott & Waterhouse (1969) (以下 T & W と略す)

この論文では *already* と *yet* が相補的な機能をもつということが述べられているが、ここでは *already* の扱いに限定して考察することにしたい。

一般に *already* には状況の変化を含意する働きがある。

(1) John already floats.

この文は John が (今現在) 浮いているということを表わすだけでなく、以前は浮くことができなかったが、今ではできるということを含意する。この点で already は become のようないわゆる inchoative verb と同様の機能を持つといえる。

(2) a. This metal is already hard.

b. This metal has become hard/hardened.

また already は完了形の文とも paraphrase 関係をもつ。

(3) a. He is already here.

b. He has arrived.

T & W ではこのような事実は深層における PERFECT という aspectual element により説明できるとしている。¹⁾

already が完了形と共に起している場合には PERFECT という素性は already ではなく完了形として具現される。従ってそのような場合、already には単に完了性を強調する働きしかない。

これに対し、完了形に相当するものがない場合には PERFECT は already として具現される。

(4) a. He is already here.

b. He is here.

(5) a. Our dog can swim already.

b. Our dog can swim.

(6) a. The apples are red already.

b. The apples are red.

(4)–(6) の文で、a と b はそれぞれ根本的に意味が異なる。a の文が PERFECT を受けて完了性または「局面の変化」²⁾ を含意するのに対し、b では発話時以前の状況には全く言及せず、従って状況の変化という含意は全然もたない。

このように already は状況 (局面) の変化を含意するため、「変化」とい

うことに関連しない科学的真理を表わす文（いわゆる総称文）では用いることができない。

(7) * Oil already floats on water.

(8) * Metal is already hard.

しかし個別の動作 (activity) を表わす文では例えば (2a) のように共起が可能である。

ところで副詞 now も「局面の変化」を指示する機能をもつので、³⁾ already と同様、総称文では用いることができない。少なくともそのような文で now を用いると文法性がおちる。

(9) ? Oil floats on water now.

(10) ? John has two eyes now.

(11) ? Ducks are animals now.

このように now は already と同様、「変化」という概念を含まない文には生じることが困難である。この点で already と now には何らかの「変化」を指示する機能をもつという共通性がある。

2.2 Morrissey (1973)

この論文は still, anymore. などの分析を行なっている。まず primary tense (発話時に相当), secondary tense (過去の一点) の二点を設定し、それぞれ x, y で表わす。そしてその二点における predication の真理条件に関してこれらの副詞を分析するのである。

即ち、それぞれの時点において predication が成りたっておれば +, 成りたっていないならば - で表示する。どちらとも決められない場合には土で表わす。

このようにして still, anymore, 及び完了形の文を形式化してみると次のようになる。

(12) a. The door is still open. (+y +x)

b. The door still isn't open. (-y -x)

- c. The door isn't open anymore. (+y -x)
 d. The door has been open. (+y ±x)
 e. The door hasn't been open. (-y ±x)

さて、この論文では扱われていない *already*, *yet*, そして *now* をこの形式化に従って同様に分析してみよう。

- (13) a. The door is open now. (-y +x)
 b. The door is already open. (-y +x)
 c. The door isn't open yet. (-y -x)

(13a) については問題がない。これと (12a-c) とによって一応この形式化は *conclusive* であるといえる。

ところで (13b, c) の場合には少々問題である。*already* や *yet* は前述の *still* などとは違って過去時の一点における状況はそれほどはっきり指示しない。強いて考えれば共に一ということがいえよう。従って *already* は *now* と、*yet* は *still not* と同じように分析できる。

このように *Morrissey* の分析に従っても一見 *already* と *now* は同じ機能をもつようであるが、*already* の場合は *anymore* や *now* のように過去時の一点と現在時との関連を問題にするのではなく、むしろ未来の時点との関連ということによる方がうまくその機能を分析できるようである。この点では *yet* も同じである。これについては「前提」及び「予想」ということと関連して次節でふれることにする。

また *still* については *anymore* や *now* とともに *Morrissey* の形式化により分析できるが、同時に未来時における何らかの「予想」をもつ⁴⁾ という点で *already* や *yet* と同類であるといえる。

小論では *still* について扱う余裕はないので、ここでは *anymore*, *now* という系列と *already*, *yet* という系列とが存在し、*still* はそのどちらにも関連しているということにとどめておきたい。

3. 「前提」と「予想」

3.1 Horn (1970) の分析

Horn (1970) は前提と断定ということにより *already/yet* と *still/anymore* の意味表示を行なっている。⁵⁾

(14) *already/yet* 前提: $(\exists i)(i > 0 \ \& \ t_i(S))$

断定: $t_0(S)/\sim t_0(S)$

(15) *still/anymore* 前提: $(\exists i)(i < 0 \ \& \ t_i(S))$

断定: $t_0(S)/\sim t_0(S) = t_0(\sim S)$

即ち *already* の場合、S という事態が起こると前提される時点 t_i よりも以前の t_0 (現在時) において S が起こったことを意味する。

同様に (not) *yet* では、やはり t_i において S が起こることが前提されているが、それ以前の t_0 では S が起こっていないことを表わす。

これを実際の例文に適用してみると以下ようになる。

(16) a. It is already raining.

b. It isn't raining yet.

前提: It will be raining sometime later.

断定: It is raining now. / It isn't raining now.

(17) The apples are already red.

前提: The apples will be red sometime later.

断定: The apples are red now.

また前節でとりあげたいわゆる総称文において *already* が用いられない理由もこれによって説明できる。

(18) *Oil already floats on water.

前提: *Oil will float on water sometime later.

断定: Oil floats on water now.

つまり(18)の文では前提部(P)自体が意味をなさないためこの文が非文となるのである。

3.2 予想と前提

Horn (1970) の分析に対し、太田 (1980) では Ladusaw (1980) に従って、already は「予想」という概念によって表示できるとしている。それによると already と yet は次のような意味表示で表わせることになる。⁶⁾

(19) already

予想: $\exists t_i > t_0(t_i(S))$

断定: $t_0(S)$

(20) yet

予想: $\exists t_i < t_0(t_i(S))$

断定: $t_0(\sim S)$

Horn (1970) と大きく違うのは $t_i(S)$ が予想であるのか、それとも前提であるのかということである。(19)に従うと、already は t_i において S が起こることが予想されていたが、それより以前の t_0 において既に S が生じたことを示す機能をもっていることになる。

ではこのことを考えるためにいくつか例文を検討してみることにする。

(21) The successful fishermen of that day were already in and had butchered their marline out and carried them laid full length across two planks... — OMS

(22) He was letting the current do a third of the work and as it started to be light he saw he was already further out than he had hoped to be at this hour. — OMS

(23) “There are many men here now in the hills.
Too many. It is already hard to get food.” — WBT

(24) And there would be plenty of material to draw them from. There was plenty already. There was a little too much sometimes.
— WBT

これらの例文をみると確かに already は予想されていた事態が現在既に実現していることを示しているといえる。特に(24)の場合はその直前の文と

あいまって、「(意見を引き出す)材料がたっぷりある」ことは前提というよりも予想と考えた方がしっくりくるように思われる。(もっともこれを前提と考えることも可能であるのでこれだけではどちらであるかを決定する材料にはならない。)

次に(25)を見ることにする。

(25) "I would like to go. If I cannot fish with you, I would like to serve in some way."

"You bought me a beer," the old man said. "You are already a man." —OMS

この文は、少年がいずれは大人になると予想されていたのが既に「一人前の男」になったことを表わしている。しかしこれにしても子供がいずれは大人になる、というのは前提だと考えることも可能である。

では次の例はどうであろうか。

(26) "Who gave this to you?"

"Martin. The owner."

"I must thank him."

"I thanked him already," the boy said. —OMS

(27) The other watched the old man with his slitted yellow eyes and then came in fast with his half circle of jaws wide to hit the fish where he had already bitten. —OMS

この二つの例では、今後起こると予想されたことが既に起こったということよりも、むしろその事態が現在までに生じたということに重点をおいた使われ方がされている。つまり「完了性」に重点がおかれていると考えられる。このような場合、予想(前提)のあるなしよりも「変化」自体に強調がおかれていると考えることができる。

従ってこれら二つの例に見られる *already* には前述した(一 y + x)を指示する機能が明確に見られる。

(一 y + x)という表示ができるという点で、(26)、(27)に現われた *already* は次の文の *now* とほぼ同じ機能をもつと考えられる。

- (28) She set down the flat iron platter in front of him and he noticed her handsome brown hands. Now she looked him full in the face and smiled. — WBT

前述の(23)の文中の now も同じである。

このように見てみると already は予想（前提）していた事象が早く生じたことを含意するのももちろんであるが、それだけでは(26), (27)のような例はうまく扱えないことがわかる。

むしろ(26), (27)のように「変化」(−y +x)を指示するのが already の本来の機能であると考えた方がよい。「変化」があつてはじめてそれが（結果的に）早いかどうかが問題になるのである。従つて already も now も本来の機能という点では共通であるということが出来る。

次節ではさらに「変化」と「予想」ということに関して already と now の関係を考察したい。

4. already と now

前述のように太田 (1980) では Ladusaw (1980) に従つて「予想」と「前提」を使いわけている。この違いが最もうまく現われているのが still not と not yet の違いに関してである。

- (29) a. The dean still isn't here.
b. The dean isn't here yet.

(30) a. still not	$\sim S(P)$	$\sim S(A)$	P: 前提
	— I —	— I —	A: 断定
	t_i	t_0	EX: 予想
b. not yet	$S(EX)$	$\sim S(A)$	
	— I —	— I —	
	t_i	t_0	

still not も not yet も Morrissey の分析では (−y −x) で表示される。ところが実際には(29)の文には意味の違いがある。⁷⁾この違いを、一方は「前提」、他方は「予想」ということで明らかにできる。

これを用いると already と now も同様に分析できると思われる。前述の Morrissey の形式化では、どちらも $(-y + x)$ で表わされている。

これを次のように図式化してみれば already と now の違いがはっきりする。⁸⁾

(31) a. now	$\sim S(P)$	$S(A)$	
	— I —	— I —	
	t_i	t_0	
b. already	$\sim S(P)$	$S(A)$	$S(EX)$
	— I —	— I —	— I —
	t_i	t_0	t_i'

一見して問題になるのは t_i における状況である。 t_i において still や yet のように $\sim S$ が前提とできるであろうか。 t_i における状況は open といえないだろうか、という疑問が生じるかもしれない。

この疑問を解決するために、次のように考えてみよう。もしも t_i において $\sim S$ でなかったのであれば、即ち常に S が成りたっていたのならばことさら now を付加する必要はない。これは総称文の分析で既に述べた通りである。ゆえに now を付加するということでは t_0 に焦点をあてる必要があるということは、そこに何らかの「変化」があったこと、即ち $\sim S \rightarrow S$ という変化があったことを含意するに他ならない。従って t_i において $\sim S$ であったということは既定の事実であるということができ、 t_i において $\sim S$ が前提されているといってもおかしくはない。

一方 already についても同様のことがいえる。already は一見したところ発話時 (t_0) 以前の状況よりも、それ以後の時点で焦点をあてているようである。(未来時 t_i における事態を予想するという点において)

しかし already も間接的にはあるが t_i における $\sim S$ を前提しているといえる。そもそも t_i において S を予想すること自体が $\sim S \rightarrow S$ を含意することになる。前述の now の場合と同じく常に S が成りたっているのならば予想の必要がないからである。故にどこかの時点で $\sim S \rightarrow S$ を含意することになる。そして現在時 t_0 において S を断定しているのであるから、当然

のことながら過去時 t_i では $\sim S$ が成りたっていることは前提とされるのである。

(31)にもどって、結局のところ *already* と *now* の違いは、前者が t_i において S を予想するということにしばられる。どちらも $\sim S \rightarrow S$ が生じたということは指示する。しかし後者が $\sim S \rightarrow S$ の生じた「時期」については何も含意しないのに対し、前者はその変化の生じた時期が予想より早かったという含意をもつのである。

5. 結 び

太田 (1980) では *still*, *still not*, *not anymore* を概略以下のように表示している。

- (32) *still* : $S \rightarrow S$ *still not* : $\sim S \rightarrow \sim S$
 not anymore : $S \rightarrow \sim S$? : $\sim S \rightarrow S$

最後の $\sim S \rightarrow S$ にあてはまるものとして、米方言の *anymore* が指摘されている。⁹⁾

- (33) I eat fish anymore.

また Morrissey (1973) でも $(-y+x)$ に該当する副詞は明示されていない。しかし(33)の *anymore* の代りに *now* を用いれば、「以前は魚を食べなかったが今は食べる」という含意をもち、これはまさに $\sim S \rightarrow S$ に該当するのである。

- (34) I eat fish now.

さらに *already* にも $\sim S \rightarrow S$ という状況の変化を指示する機能があることは、以上の議論で明らかであると思われる。*already* の場合は一見したところ $\sim S \rightarrow S$ の変化自体よりもその変化の生じた時期に重点がおかれ、それによって「予想」より早く S が生じたという含意をもつようである。

しかしながらそのような含意は、いわば二次的なものであって、*already* のもつ本来の機能は $\sim S \rightarrow S$ が起こったことを指示する、ということなのである。これは例文の検討の際に述べた通りである。

ゆえに *already* と *now* は共に $\sim S \rightarrow S$ を指示するという点において同じ機能をもつといえる。そしてこのような $\sim S \rightarrow S$ という変化を「状況の変化」あるいは「局面の変化」と言いかえるならば、*already* と *now* は「局面の変化」を指示する機能をもつということが出来る。この点で *already* は *now* とともに、Phase Marker であるということが出来る。10)

さらに、小論では扱う余裕はなかったが、 $\sim S \rightarrow S$ とは逆の変化、即ち $S \rightarrow \sim S$ を表わす *not anymore* もある種の「局面の変化」を指示するといえることがいえそうである。また *still* や *yet* との関連も興味深い問題である。

注

- 1) ここで言う PERFECT とは直接完了形に結びつくものではなく、むしろ abstract PERFECT とでも言うような素性である。
- 2) くわしくは家木 (1982) を参照されたい。
- 3) 家木 (1982) を参照。
- 4) *still* のもつ「予想」という含意については Ladusaw (1980) を参照されたい。
- 5) この場合、前提部は *already/yet* に共通であり、断定部のみが異なる。*still/anymore* についても同じ。なお後述の太田 (1980) では Bolinger (1977) に従って、前提部も *already* と *yet* では異なるとする分析を採用している。
- 6) 実際には太田 (1980) が基にしているのは Ladusaw, W. A. (1978) "The scope of some sentence adverbs and surface structure," *NELS* 8, pp. 97-107. であるが、ここではそれを発展させた形の Ladusaw (1980) の方を参照している。
- 7) (29 a, b) の意味の違いについては太田 (1980) p. 296 を参照されたい。
- 8) ここでは便宜上 *already* は *ti* において S を「予想」という立場をとっている。その方が *ti* における $\sim S$ の「前提」と対照的になり、わかりやすいからである。
- 9) (33) は「私は今では魚を食べる」という意味をもつ。このような 'positive' *anymore* については Ladusaw (1980) に取りあげられている。Ladusaw (1980) pp. 96-97 を参照されたい。なおこのような 'positive' *anymore* は新しく使用され始めている方言のようであって、一般的であるとはいえない。
- 10) Phase Marker については家木 (1982) を参照されたい。

参 考 文 献

- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*, Longman.
- Gallagher, M. (1969) *Have and the English Perfect*, Ph. D. Dissertation, the University of Illinois at Urbana Champaign.
- 東森勲 (1982) 「Already と非完了形について」
『神戸学院大学紀要』第13号 pp. 159-172.
- Hirtle, W. H. (1977) "Already, Still and Yet," *Archivum Linguisticum* Vol. VIII, No. 1, pp. 28-45.
- Horn, L. R. (1970) "Ain't it hard (any more)," *CLS* 6, pp. 318-327.
- 家木康宏 (1982) 「'Phase' Marker としての now」
『英米文学・研究と鑑賞』No. 30, pp. 26-44.
- Ladusaw, W. A. (1980) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*, Indiana University Linguistics Club.
- Morrissey, M. (1973) "The English perfective and 'still' /'anymore'," *Journal of Linguistics* 9, pp. 65-69.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館。
- Quirk, R. et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman.
- 鈴木英一 (1983) 「already の用法について」『言語情報』筑波大学 pp. 57-78.
- Traugott, E. C. and J. Waterhouse (1969) "'Already' and 'yet': a supplementary set of aspect-markers?" *Journal of Linguistics* 5, pp. 287-304.

引 用 文 献

- OMS E. Hemingway, *The Old Man and the Sea* Bantam Books.
- WBT E. Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* Bantam Books.